

幼児期における自然体験としての栽培活動を支えるために To Support Cultivation Activities as Nature Experiences in Early Childhood

高岡 昌子
Masako TAKAOKA

要旨 (Abstract)

幼児期における自然体験活動としての栽培活動を通しての多様な体験は、幼児教育における「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の5領域につながる体験でもあり、アプローチカリキュラムにおいても効果的な体験となり、さらに生きる力の涵養にもつながるため、保育所・認定こども園・幼稚園において、栽培活動を取り入れられているところが多い。山本ら(2006、2009)の研究においても、園芸活動によって「保育内容のすべての領域(健康、人間関係、環境、言葉、表現)において園児により効果がみられる」ことを示している。さらに国立青少年教育振興機構青少年教育研究センターの研究(2019、2021)からも、子どもの自然体験は自己肯定感や探求力を高める等、子どもの心に効果的であると示唆している。また馬場(2020)では、植物とのふれあいが子どもたちのストレスの軽減につながると述べている。しかし近年では土の地面のない保育施設も増え、経済的事情や働き方改革で栽培活動や飼育活動も縮小せざるをえない園も増えてきた。フレーベルの理想とするKindergarten「子どもたちの庭」のような環境を維持していくためには、もはや保育者だけでは難しく、地域と連携して地域社会全体で子どもの自然体験活動を支えていく必要がある。

キーワード：乳幼児教育、保育、自然体験、栽培(園芸)、活動、心理的効果

I. はじめに

幼児期における自然体験活動としての栽培活動の意義は大きい。山本ら(2006、2009)は、保育所の園芸活動によって保育内容のすべての領域(健康、人間関係、環境、言葉、表現)において園児により効果がみられたことを示している^{20) 21)}。また、山本ら(2011、2012、2013)では、幼少期の栽培体験が成長後の社会性の獲得により影響を及ぼしたことが示された^{23) 24) 25)}。さらに山田・渡邊(2012)でも、栽培活動で、「心の安定、生長の喜び、興味・関心の広まり、深まり」が得られると示唆された¹¹⁾。高岡(2016)や武川ら(2001)等では、園芸等の自然体験活動が心身を癒すことにつながる活動であることを示唆している^{17) 18)}。木島(2002)では、「農園芸活動は、子どもの発達保障あるいは発達支援として重要な役割を担っている」と述べ、障害児施設でも、農園芸作業が障害児の発達に種々の良い効果をもたらすことから、園芸活動が取り入れられてきたことを述べている¹⁹⁾。山中(2006)は、臨床心理学的な立場から子どもたちが自然と接触することの必要性を示唆している¹²⁾。

国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センターの「青少年の体験活動等に関する意識調査(令和元年度調査)」報告書の5頁の図2-1-1 自然体験と探究力の関係(小4~小6、中2、高2)をみると、明らかに自然体験が多けれ

ば探求力も高いということがわかる^{1) 2)}。また、87頁の図3-3-25 自然体験と自己肯定感の関係(小4~小6、中2、高2)をみると、明らかに自然体験が多ければ自己肯定感も高いということがわかる^{1) 2)}。直観的思考段階に生きる幼児にとっては、実物からの学びが重要であるため、幼稚園やこども園、保育所では、花や野菜の栽培活動をしたり、動物や昆虫を飼育したりしている。特に栽培活動は、人間として生きるための重要な基盤となる活動であるだけでなく、小学校に入学後の学習にもつながる活動であるため、ほとんどの幼稚園やこども園、保育所において盛んに行われている。さらに馬場(2020)では、植物とのふれあいが子どもたちのストレスの軽減につながると述べている³⁾。しかし近年では待機児童問題解消のために駅前のビルの一角にあるような保育施設も増え、経済的事情や働き方改革で栽培活動や飼育活動も縮小せざるをえない園も増えてきたようである。本資料では、幼児教育・保育の現場における自然体験活動を報告し、フレーベルの理想とする Kindergarten「子どもたちの庭」¹³⁾のような環境を維持していくためには、もはや保育者だけでは難しく、地域と連携して地域社会全体で子どもの自然体験活動を支えていくことが必要であると伝えることを目的としている。

II. 幼児期に経験する主な栽培活動としてのサツマイモの栽培活動に関して

幼児期に経験する自然体験活動として、サツマイモの栽培活動や収穫活動等は、幼稚園やこども園、保育所で取り入れられているところが多い(図1、図2、図3)。サツマイモは紀元前から食されていて、人間が生き抜くために必要な救荒・備荒作物でもあり、サツマイモの栽培活動体験も「生きる力」につながる体験となる。子どもたちはサツマイモの挿し穂を植え、栽培体験をして、芋ほり体験を通して収穫の喜びを味わい、またその直後に食育体験、さらにそれらの体験を言葉で表現したり、サツマイモを描いたりつくったりする表現活動につなげている園(所)も多い。そして小学校でも、サツマイモが生活科や理科ではもちろんのこと、図画工作科や国語の教科書でも題材として出てくるのである。したがって幼児教育の中で子どもたちがサツマイモの栽培活動体験をすることは、円滑に小学校での学びにつなげていくための重要な体験になるだけでなく、一生にわたっての「生きる力」にもつながる体験となるのである。菅(2007)でも、「おイモほり」は多くの幼稚園で行われることを述べ、植えて収穫するまでの長期にわたる一連の栽培活動から、子どもたちが多くのことを学ぶことを示唆している。例えば、サツマイモの栽培体験を通して、サツマイモの成長について、3歳児では擬人化や心理学的説明がみられ、4歳児では生物学的説明がみられ、認識の発達の変化がみられたということであった⁴⁾。



図1 N幼稚園のサツマイモ畑



図2 O幼稚園のサツマイモ畑



図3 N幼稚園の収穫後のサツマイモを園庭で干しているところ

本著者が担当する授業の中で、幼少期の体験に関わる内容についての思考を深めていただくために、女子学生にグーグルフォームを利用したWEBアンケート形式を用いて「私は幼少期のころに芋ほり体験をしたことがある」かどうかについて尋ねる質問をしたことがある。回答は無記名で自由であることを伝えて質問したため、自由回答した学生は196名中191名であった。具体的には、10:「とても当てはまる」~0:「まったく当てはまらない」の11件法で聞いたところ、図4のように、ほとんどの学生が芋ほり体験をしたことがあるというように回答してい

た。この図4等をもとに学生に幼稚園や保育所における体験に関する話を進め授業内容に生かした。

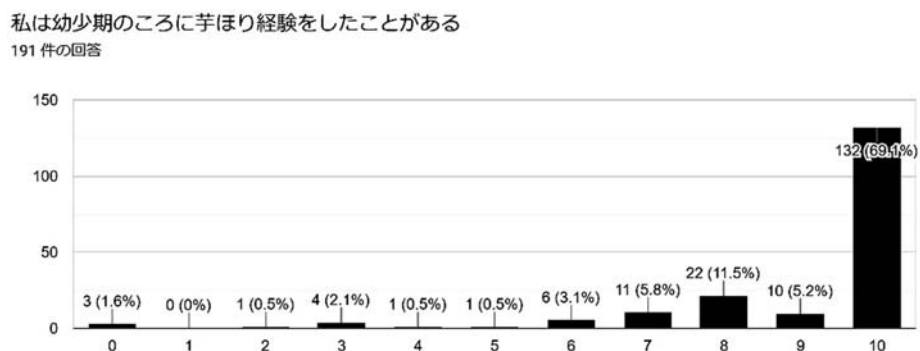


図4 幼少期における芋ほり体験に関する記憶

このように「芋ほり体験」は幼児教育・保育において重要な体験であるため、保育者養成校における教育にも取り入れられているところが多い。全国保育士養成セミナー第4分科会の杉浦ら（2023）による「作物の栽培を養成校の授業でいかに扱うか」という発表では、保育園での栽培活動の実例もあげられて、保育者養成校で保育学生が栽培活動を体験しておくことの必要性を示唆していた⁵⁾。

Ⅲ. 幼児期に経験する栽培活動を支える連携のために

サツマイモ以外にも教科書に出てくる植物は多種にいたる。幼稚園・認定こども園・保育所においても園庭でさまざまな花や野菜の栽培活動を行っている。例えば、図5はTこども園の道沿いの細長い畑であり、図6はその細長い畑に面した側道から撮った写真である。この地域の人々からよく見える畑では、図6の道を通る地域の方々と園内にいる子どもたちとの間でコミュニケーションも生じやすいらしい。そのため、地域の方々が栽培に関して指導してくださったり、栽培活動を支援するために苗を持ってきてくださったりしてきたということで、大変理想的な畑である。また登園・降園時にも道から見えやすく、保護者との間で作物の成長を共有しやすいところも理想的である。



図5 Tこども園の道沿いの畑



図6 Tこども園の道沿いの畑（道から）

Ⅳ. 子どもの自然体験活動を支える保育者養成のために

子どもたちは、園庭で栽培活動を経験することで、土を触って苗を植えたり、水を遣ったり、草を抜いたりして世話をしていく中で、さまざまな昆虫にも出会い、たくさんの知らないことに直面する。その都度、友達と話し合ったり、先生に聞いたり、調べたりすることができる環境であることが望ましい。予め効果的な絵本や図鑑を子どもたちのまわりに置いておき、保育者も一緒になって「調べる」活動をすることが望まれている。文部科学省の「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために」（報告）では、養成段階における課題として「教員志望者自身の多様な体験・得意分野の素地の形成」の必要性をあげていて、生活体験や自然体験、社会奉仕体験な

どが不足している学生の存在を指摘し、「多様な体験を得る機会を増やすことが望ましい。」と述べている⁷⁾。この文部科学省が示す課題を向坂（2016）でも引用した上で「保育学生の生活体験、自然体験の不足が就職先の保育現場においても課題となっていることがうかがえる」と書いている⁸⁾。そして保育学生が栽培に関する体験をしておくことの必要性を示唆している。

植物の世話をすることで栽培物が日々成長していく喜びを感じて、日々充実感をもてる園生活を送ることができるだろう。さらに育てて咲いた花を絵に描いたり、紙で表現したり、室内に飾ったり、収穫した野菜や果物から種をとったりする体験、それらの体験を伝え合う体験も、子どもたちにとっては楽しい体験になるだろう。特に栽培活動から食育につなげていくプロセスは効果的であると考えられている⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。これらの栽培活動を通しての多様な体験は、幼児教育における「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の5領域につながる体験でもありアプローチカリキュラム的にも効果的な体験となるであろう。だからこそ、多くの保育者養成大学でも栽培活動を取り入れて教育を行っているのである。

図7はN幼稚園の「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」につながる活動について理解を深め、多くの自然体験活動も含む活動が幼児期において重要な体験となることが一見してわかるように作成されている園内掲示物である。この掲示物は、保護者に「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」につながる活動を伝えるために大変効果的であり、さらに保育者にとっては作成段階から「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」につながる活動を再認識するために効果的である。この掲示物のなかにも記されているように「目に見えない力を育てる」ことや「非認知能力を育てる」ことも重要である。長谷部（2020）においても、自然あそびで子どもの非認知能力が育つことを示唆している¹⁵⁾。本学でも、学生たちが、幼児教育に栽培活動が取り入れられてきたことの意義や効果について正しい知見を持ち、学生たちが卒業後に現場で即戦力を発揮できるように、出原（2010）¹⁵⁾や大豆生田ら（2014）²⁷⁾で紹介されているような自然あそびを一層伝えていくことができるように教育をしていきたい。



図7 N幼稚園の「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」についての園内掲示物

V. おわりに

船越ら（2023）は、自然体験活動やESD（Education for Sustainable Development）を取り入れた養成教育を行うことが、保育者養成校と保育現場の質の向上という好循環を生み出す可能性があるとして述べ、さらに地域資源と連携・協働して実体験が伴う活動を取り入れていくことの必要性を述べていた¹⁶⁾。保育者養成校において自然と関わる活動を体験できるように企画・運営したりすることは、学生の実践力や専門性の向上につながると考えている。馬場（2020）では、「保育士養成において、植物についての知識と栽培技術の習得、また、それらをどう保育に活かす子どもたちの心を癒すことができるかを構築する保育能力の養成は、現在の保育現場で求められるものであろう。」と述べて、園芸療法士の資格を持つ保育士の養成の意義を指摘している³⁾。しかし先述したように土の地面

の園庭のない保育施設も増え、園庭での子どもたちの自然体験活動の充足も困難になってきているだけでなく、保育者養成校においても学生の自然体験活動の充足が難しくなっている。山下（2018）では、保育者養成課程での必修授業の一部として近隣の子どもを招いて行う自然体験活動を紹介され、「このような活動を増やしていくためには、一教員だけの力では難しく、必要とされる公的な支援と大学組織の中での支援内容についても検討していくことが望まれる。」²⁵⁾と述べている。山本（2018）でも、子どもの「自然体験を支援していく大人の見守りが求められる。」²⁶⁾と述べている。幼児の自然体験活動を支えていくためには、皆が幼児の自然体験活動の意義に関する理解を深め、保育者だけでなく、保育者養成校そして地域社会全体で幼児の自然体験活動を支えていくことが望まれている。

都市化、核家族化、職場環境悪化による親の多忙化、地域社会との関係希薄化が進み、休みの日も家の中で一人で長時間ゲームをして過ごす子どもたちが増えてきている。土に触れ合える場所も少なくなっている中で、自然体験活動のできる場所やイベントに連れて行ってもらえる家庭かどうかで、子どもに体験格差が生じるのではないだろうか。そのような格差が生じないようにするために、幼稚園、こども園、保育園の園庭や地域の公園で日頃からどの子どもも自然体験活動をできるようにするためにはどうしたらよいかについて、社会全体で考えていくことが必要であろう。

謝辞

まず、写真を撮らせていただきました園の皆様に御礼申し上げます。本資料は令和5年度学校法人奈良学園共同研究助成金を得た研究のための先行研究となる情報を紹介した資料です。共同研究の機会をいただきました学校法人奈良学園理事長伊瀬敏史先生はじめ奈良学園大学学長金山憲正先生そして皆様に深く御礼申し上げます。現在、榎康二先生、福呂匠先生、村山翔大先生、石原由貴子先生、岡村季光先生、岡野聡子先生、藤田信子先生と共同研究「身近な自然体験が子どもの心に及ぼす影響～登美ヶ丘キャンパスの自然を生かして～」を進めているところで、共同研究の成果は別の資料もしくは次年度の紀要で発表する所存でございます。アドバイスをいただきました中田章子先生と角田道代先生、谷川具子先生、磯辺ゆう先生にも心から御礼申し上げます。

文献 (References)

- 1) 池田幸恭・村上徹夜・土屋隆裕 (2019) 国立青少年教育振興機構総務企画部調査・広報課「青少年の体験活動等に関する意識調査 (令和28年度調査)」編集・発行 国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター総務企画部調査・広報課.
- 2) 池田幸恭・金藤ふゆ子・加藤承彦・土屋隆裕 (2021) 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター「青少年の体験活動等に関する意識調査 (平成元年度調査)」編集・発行 国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター.
- 3) 馬場住子 (2020) 「園芸療法士の資格を持つ保育士養成の意義 —フレーベル『母の歌と愛撫の歌』に描かれた教育思想を基に—」『甲子園短期大学紀要』38: 17-21.
- 4) 菅真佐子 (2007) 「幼稚園での栽培活動を通して子どもは何を学ぶか: 3歳児クラス、4歳児クラスの「おもほり」の活動をめぐって」『滋賀大学教育学部紀要』II, 人文科学・社会科学, 第57号, 73-82.
- 5) 杉浦広幸・目黒勇樹・保木井啓史 (2023) 「作物の栽培を養成校の授業でいかに扱うか」全国保育士養成セミナー第4分科会 47-50.
- 6) 向坂幸雄 (2016) 「保育系短期大学生の栽培活動における課題 —保育内容「環境」でのヒマワリ栽培を通して—」

- 『中村学園大学発達支援センター研究紀要』第7号 97-102.
- 7) 文部科学省(2002)「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために」(報告)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm 2002年.
- 8) 木田春代・武田文・荒川義人(2016)「幼稚園における野菜栽培活動が幼児の偏食に及ぼす影響～トマト栽培に関する検討～」『栄養学雑誌』74(1), 20-28.
- 9) 地下まゆみ・富永美香・井上美智子(2019)「環境教育の観点から見た保育における栽培活動と食育の連携に関する研究」『大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要』9号, 27-35.
- 10) 富永美香・地下まゆみ・井上美智子(2021)「環境教育の観点から見た保育における栽培活動と食育の連携に関する研究(Ⅱ)」『大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要 11号』35-44.
- 11) 山田剛史・渡邊杏子(2012)『心を育てる栽培活動』京都 泉山幼稚園
https://youchien.com/research/meeting/2012/attqmr00000001ci-att/2012_33_cultivation.pdf
- 12) 山中康裕(2006)『子どもの心と自然(いのちの科学を語る)』東方出版.
- 13) 玉川大学出版会(1991)『幼稚園における子どもたちの庭』フレーベル全集 第四巻 551.
- 14) 出原大(2010)『自然・植物あそび一年中—毎日の保育で豊かな自然体験!』(Gakken 保育 Books) 学研プラス.
- 15) 長谷部雅一(2020)『自然あそびで子どもの非認知能力が育つ』東洋館出版社.
- 16) 船越美幸・加藤友彦・堅田弘行・高橋泰道(2023)「自然を活用した保育・幼児教育」における養成校と現職・行政の連携・協議—地域資源を生かした「自然体験活動」・「ESD」の実態と課題—」令和5年度全国保育士養成セミナー 中・四国ブロック研究助成 成果発表.
- 17) 高岡伸夫(2016)『ガーデンセラピー 心身を癒やす究極の自然療法』幻冬舎.
- 18) 武川満夫・武川政江(2001)『園芸療法—21世紀を健康に生きる』源草社.
- 19) 木島温夫(2002)「人間の発達と園芸活動(教育としての園芸)」『滋賀大学教育学部 人間・植物関係学会雑誌』(JJSPPR) 2(1), 15-19.
- 20) 山本俊光・森啓一郎・松尾英輔(2006)「保育所における園芸の保育効果—福岡市の事例から—」『人間・植物関係学会雑誌』5(2), 13-18.
- 21) 山本俊光・森啓一郎・松尾英輔(2009)「園芸活動をした園児をみる保育者の姿勢に関する一考察—福岡市と北九州市の保育所の事例から—」『人間・植物関係学会雑誌』8(2), 23-30.
- 22) 山本俊光・森啓一郎・松尾英輔(2011)「幼児期. の栽培体験と成長後の社会性との関係—女子学生と園児の母親の場合—」『人間・植物関係学会雑誌』10(2), 13-20.
- 23) 山本俊光(2012)「幼少期の自然体験と大学生の社会性との関係: 親の養育態度をふまえて」『環境教育』22(1), 14-24.
- 24) 山本俊光(2013)「高校生の幼少期の自然体験と現在の社会性」『福岡大学研究部論集 B 社会科学編』, 6, 81-93.
- 25) 山本俊光(2018)「幼少期に自然体験を頻繁に体験した若者の社会性」『環境教育』28(1), 2-11.
- 26) 大豆生田啓友・小西貴士(2014)『子どもがあそびたくなる草花のある園庭と季節の自然あそび』フレーベル館.
- 27) 山下久美(2018)「保育者養成課程における子どもの自然体験活動の意義: 東洋英和女学院大学と横浜市の共催による「もりっこ」活動を事例にして」『人文・社会科学論集』35号, 1-16.